

## 令和3年度 学校経営方針

新潟市立大形中学校  
校長 永井 一哉

昨年度は、新型コロナウイルス感染症による影響を大きく受けた1年であった。そして、その影響は今年度以降も続いていき、私たちは「With コロナ」の中で生徒の育成に努めていくことになる。感染防止に努めながらも、生徒の確かな学びと健やかな育ちのために力強く教育活動を展開していかなければならない。

さて、今年度から学習指導要領が全面実施となる。学習指導要領の趣旨を理解し、それに沿って教育活動を展開していくことが求められる。

改めて、改定の基本的な考え方を示す。

- 子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成する。その際、求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「開かれた教育課程」を重視する。
- 知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する。その上で、知識の質をさらに高め、確かな学力を育成する。
- 道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体の育成を図る。

また、学習指導要領の改定と時期を同じくして、新潟市教育ビジョンも昨年度から第4期実施計画がスタートした。ここでは、自信をもって自己実現を図る生徒の育成と、地域との連携・協働によって「地域とともにある学校」づくりを推進することが強く求められている。

〔新潟市教育ビジョン 第4期実施計画〕

これからの社会をたくましく生き抜く力の育成

～学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくり～

視点1：これからの社会で自信をもって自己実現していける子どもの育成

- 子どもの自己肯定感を高める
- 子どものコミュニケーション能力を高める
- 学校・学級の支持的風土を醸成する

視点3：地域と一体となった学校づくりの推進

- 地域と学校が目標を共有し、一体となった取組の推進

本日、校長として大形中に着任した。生徒の実態を含め、大形中の状況を十分に把握していない中ではあるが、校長として目指す学校経営の基本方針を以下に示す。このもとで、今年度の学校経営をスタートし、学校や生徒の実情、課題を見つめながら、必要な修正を柔軟に行っていくこととする。

### 1 資質・能力の育成を図る教育の推進

学習指導要領において、将来をたくましく生き抜く生徒に必要な「資質・能力の育成」が明確に打ち出されているとおり、私たちは生徒が「生きる力」を確かに身に付けるよう育成に努めなければならない。そこで、次のことを常に意識しながら、学校経営を行い、教育活動に取り組んでいく。

- 教育活動を行うに当たっては、育成を目指す資質・能力である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の具体を明確にして、取組を進める。
- 取り組む全ての教育活動において、「目指す生徒像」「身に付けさせたい資質・能力」の視点から活動の在り方や内容・方法等を見つめ、その達成に向けてぶれずに取り組んでいく。

これによって、生徒の育成の視点に対する私たちの姿勢や考え方、取組のベクトルをそろえ、一枚岩となって生徒の学びと育ちを支えていく。

## 2 生徒の自主性・主体性を大切にした教育活動の推進

「子どもが真ん中」「まず子どもありき」という教育の原点に立ち、学校が果たすべき役割である、子どもの「成長の保障」と「学力の保障」を果たしていく。そのためには、学校経営や教育活動が真に「生徒にとってのよさ」で語れるものでなければならない。

教育活動を推進するに当たっては、生徒の自主性・主体性の育成を柱とし、次の点を重視して取り組んでいく。

- 授業や学級活動、生徒会活動等において、「自ら課題を見つけ、その解決に向けて自ら取り組む」生徒の姿勢を大切にする。
- 自主的・主体的な活動が生徒の自己決定を受けたものとなるよう、適切に支援する。

私たち教職員が「教える」「指導する」「指示する」「型にはめる」という考え方から脱却し、「生徒に預ける」「生徒にとことん考えさせる」「生徒とともに考える」「生徒の決定を受け入れる」という考え方となって、生徒が自ら育つことを待てる存在となることを目指す。「指導者」から「支援者・伴走者」へと、私たちの意識を変えていかなければならない。

生徒が「自分で決めた」ことの自覚と強い思いをもって活動に取り組むことで、本当の意味での「自主性・主体性」が発揮され、その結果として、生徒の「目指す姿」の達成と資質・能力の確かな育成につながるものとする。

## 3 時代を見据えた学校改革の推進

時代が大きく変わりつつある現在、学校も時代に合わせて変わっていかなければならない。さらに言うならば、将来を生きる子どもを育てるためには、時代の先を見据えて学校が変わっていかなければならない。「変わらない」「変えない」ことが子どもにとってのよさで語れないならば、勇気をもって変えていくことが必要である。慣例や前例踏襲ありきの姿勢であってはならない。

- 「生徒の育成」と「教職員の働き方」の2つの視点から、改革の必要性を考え、判断する。
- 未知なるものへの挑戦を困難と捉えず、期待感をもって取り組む姿勢を大切にする。
- 学校改革が「積み上げ」の連鎖を生まないように留意する。優先順位の低いものや重要な意味を見いだせないもの、また、教職員の本来業務ではないものは、思い切って「切り捨て」ていくことを視野に改革を推進する。

物事を変えていくには、その内容や方法、タイミングやスピードを吟味する必要があるが、いざ「変える」となったときは、躊躇せず取組を進めていく。

## 4 「チーム大形」としての教職員集団の意識の強化

生徒の望ましい成長に向けて、私たちは一枚岩となって教育を推進していかなければならない。そこで、教職員が同僚性・協働性を高め、一人一人が持ち味を発揮するとともに、互いのりしるを重ねながら、「チーム大形」の意識と一人一人が学校経営の一翼を担っているという自覚をもって、業務遂行に取り組んでいく。

「チーム大形」の一員としての意識として、次の3点を重視する。

- 業務の遂行に当たり、校務分掌の主担当に任せる意識から脱却し、担当を含むチームで検討し、多くの教職員で取り組むことで、学校経営への一人一人の主体的な参画意識を高める。
- 「会話」による情報交換を重視する。生徒のよさを多く語り合い、生徒の抱える課題を共に解決、改善していこうとする雰囲気職員室づくり、教職員同士の関係性の強化を目指す。
- 困難に直面したとき、問題の解決・改善の努力に向けて自分にできることを自ら考え、率先して取り組むことを通して、安心して頼り、頼られる関係性の醸成・強化を目指す。

「チーム大形」の力で学校を創り、生徒を育むことに加え、私たちの職場をより働きがいのあるものにするためにも、「チーム大形」の力を全員の意識と行動で高めていく。